

【特別支援学校用】
令和4年度学校評価 結果

学校名	佐賀県立盲学校
1 前年度 評価結果の概要	・ 自立と社会参加に向けた力の育成のために、保護者や関係機関と連携を取りながら、幼児児童生徒の実態に応じた支援・指導を行った。 ・ 専門性向上に向けた研究・研修の充実のために、職員研修等を通して専門性の向上に努めた。また、力を引き出す授業の実践を念頭に校内研究を進めた。 ・ 「目の支援センター ゆうあい」を中心に、関係諸機関とも連携しながら、弱視学級との連携や、地域に対する支援、啓発活動等を行い、センター的機能を周知することができた。
2 学校教育目標	視覚に障害のある幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた適切な支援を行い、自立と社会参加及び心豊かな人格の形成を目指す。 － 明朗・友愛・自立－
3 本年度の重点目標	『夢をはぐくみ、未来をひらく盲学校』～「誰もが安心して学べるやさしい学校づくり」を進めます～ (1) 自立と社会参加に向けた力の育成(幼児児童生徒) (2) 専門性向上に向けた研究・研修の充実と力を引き出す授業の実践(教職員) (3) 視覚障害教育センター的機能の充実と周知(社会・地域)

4 重点取組内容・成果指標	5 最終評価
---------------	--------

(1)共通評価項目									
重点取組				最終評価			学校関係者評価		主な担当者
評価項目	取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言		
●学力の向上	●幼児児童生徒一人一人のニーズに応じた指導・支援による確かな学力の定着	○あん摩マッサージ指教師、はり師、きゅう師国家試験模擬試験で合格圏内の生徒100% ○「学力の定着が図られた」「自立活動や各教科等を含ませた指導における指導と評価が適切に行われた」と回答する教員・保護者80%以上	・学習内容及び方法を適切に設定し、学習評価を通して効果的な学力の向上を図る。 ・国家試験・大学入試対策として、模擬試験、補習授業、課題配布及び課題テストを実施する。 ・全国学力・学習状況調査や県小・中学校学習状況調査、SAGAテスト、単元テスト、点字テスト、珠算検定等各種検定等を通して個々の学力の把握に努める。 ・自立活動の指導内容及び方法、評価等を適切に実施する。 ・各教科等を含ませた指導では、一人一人の実態に応じた適切な指導の在り方に留意する。	B	・合格ラインを超えた生徒は、あん摩師の模擬試験では4名中1名(25%)、鍼灸師の模擬試験では2名中0名(0%)で、数値目標を達成することはできなかった。理療科における模擬試験、補習授業、課題配布及び課題テストについて検討していく必要がある。 ・「学力の定着が図られた」「自立活動や各教科などを合わせた指導と評価が適切に行われた」と回答した職員は95.9%、保護者は95.4%であった。	B	・「見えないのにこれだけであれば十分」とゴールを決めるのではなく、少しでも自立や意思表示、社会性、人に助けてもらえるような人間性の育成等に努めてほしい。	進路指導 主事 各学部主任	
	●幼児児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○「将来の自立と社会参加に向け、生きる力や豊かな心を身に付けさせる指導が、発達段階に応じて適切に行われた」と回答する教員・保護者80%以上	・幼児児童生徒一人一人の夢や希望をふまえ、学校生活のあらゆる場面で支援と働きかけを行い、生きる力を育てる。 ・防犯、薬物、性教育講話等、さまざまな角度から人権意識の向上に努める。 ・幼児期から特別活動や学校行事等への参加を通して望ましい人間関係を形成し、集団意識を高め、他者への思いやりや社会性を養う。	A	・指導が適切に行われていると回答した職員は97.3%、保護者は90.9%だった。 ・交流及び共同学習やスポーツ交流会、ハラスポーツの体験会などを通して、他者への思いやりや他者とのかわりについて学ぶことができた。	A	・特になし	生徒指導 主事	
●心の教育	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	○「幼児児童生徒が安心して学ぶことができる環境作りに努め、一人一人の不安や悩みに寄り添いながら、いじめのない学校作りに取り組んでいる」と回答する教員・保護者80%以上	・学校生活アンケートを実施して一人一人の心の状態を把握し、安心して学べる環境づくりに努める。 ・教育相談体制を充実させる。 ・スクールカウンセラーによる講話と演習を通して自己解決能力を高める。	A	・学校生活アンケート(年3回)を実施し、幼児児童生徒の実態を把握し早期発見・早期対応に努めた。また、生徒の不安や不満、悩み等を把握し、学部と生活指導部が連携を取りながら対応することができた。 ・児童生徒へスクールカウンセラーからは毎回適切なアドバイスを受け、担任団と学部で組織的な指導に当たることができた。	A	・細やかに子供の変化や言葉に心をかためてもらっている。子供だけでなく、親にも声をかけてもらい、ありがたく感じている。 ・何かあれば担任や寄宿舎の先生から連絡があり、状況がよくわかる。	生徒指導 主事 (保健指導 主事)	
	◎幼児児童生徒が夢や希望を持ち、将来の自立と社会参加に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動	◎「幼児児童生徒の夢や希望に応じたキャリア教育及び職業教育ができている」と回答する職員・保護者80%以上	・様々な活動を通して、社会生活や家庭生活に対する関心を高め、基礎的なスキルを身につける。また、適切な勤労観や職業観を育み、将来の進路についての意識を高める。 ・自分の役割を理解し、果たそうとする態度や意欲、コミュニケーションの方法等を身につける。 ・障害による困難への理解を深め、主体的に状況を改善しようとする姿勢を育む。 ・自立心を培い、自主的・意欲的に生きる力を育む。	A	・「様々な活動を通して、社会生活、家庭生活、将来についての意識を高め、基礎的なスキルを身につけるよう努めている。」と回答した職員は95.9%、保護者は90.9%であった。 ・幼児児童生徒が主体的・積極的に課題解決に取り組む、キャリア形成を見通す等、様々な活動を通して基礎的なスキルを身に付け、幼児児童生徒の夢や希望に応じたキャリア教育及び職業教育を行うことができた。	A	・生きる力、社会性を身に付けるために、外との接点を積極的に作ってほしい。例えば、校外販売実習、他校との交流などを行ってほしい。高校福祉系列の生徒との交流は、将来のサポーターや理解者を増やすことにつながるのでは是非実現してほしい。 ・自立を促すというよりは、過保護な印象がある。	教務主任	
●健康・体づくり	●望ましい生活習慣の形成	○「健康観察簿」の記入・提出状況100% ○「日々の健康チェックを通し、将来の自立と社会参加に向けた生活習慣の確立に努めている」と回答する教員・保護者80%以上	・「健康観察簿」への記入と活用を促し、健康チェック(朝食・歯磨き・検温)の習慣を身につけさせる。 ・「保健だより」を毎月発行し、基本的生活習慣の形成に役立つ情報を発信する。 ・長期休業前に生活指導と保健指導の両面から講話を行い、生活習慣形成への意識付けを行う。	A	・「健康観察簿」を通じて健康状態を把握し、毎日の健康チェックへの意識づけができるようになった。生活習慣の確立に努めている」と回答する職員は98.6%、保護者は100%だった。 ・新型コロナウイルス感染に関して、県からの指導・助言を仰ぎながら正確な情報を入手し、迅速な対応と広報を心掛けた。また、このことに関して、不当な差別につながらないよう配慮をした。	A	・特になし	生徒指導 主事 (保健指導 主事)	
	●地域に向けた特別支援学校のセンター的機能の充実	○「相談支援活動や啓発・広報、地域の見えにくさのある幼児児童生徒への有効な教育的支援が効果的に行われている」と回答する教員80%以上	・ゆうあい教室において、見え方に困難のある幼児・児童・生徒・成人の相談に応じ、支援を行う。 ・地域に対し、本校や視覚障害教育についての啓発・広報活動等を計画的に行う。 ・弱視学級や見えにくさのある幼児児童生徒の所属校等と連携し、研修会の実施や定期的な情報提供等を行う。 ・巡回相談を行う学校・園に対し、実態や状況に応じた助言を行う。	A	・予定していた行事を全て行うことができ、情報発信を定期的に行うことができた。 ・「相談支援活動や啓発・広報、地域の見えにくさのある幼児児童生徒への有効な教育的支援が効果的に行われている」と回答した教員は95.9%であった。	A	・地域の県立高校にも弱視の生徒が在籍していると思うので、今後も支援を進めていってほしい。	相談支援 部主任	
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する職員100%	・定時退勤日を設定し、計画的に業務を行う。 ・必要に応じて学校行事や各校務分掌等の業務内容を見直す。	A	・毎週水曜日を定時退勤日としており、月あたりの時間外勤務時間が45時間以内の職員は97.8%であった。また、月平均残業時間は13時間16分(前年比-35分)であった。各学級の終業後の点検業務の簡略化、出張復命書の簡略化、冬季休業計画入力簡略化等、教育支援以外の事務作業の効率化・削減について、小さな改善を進めた。年次有給休暇の取得と取得しやすい雰囲気づくりを推進した。	A	・ワークバランスの実現に関わる問題である。業務改善、年休取得数の増加ができてきているということは、職員の相互協力体制がとれているということだと思う。	教頭 事務長	
	○円滑な教育計画の実施	○「重点目標達成のための年間行事計画が作成され、授業時間数の確保と学校行事等が両立できた」と回答する教員80%以上	・曜日の振替等により授業時間数の確保に努めるとともに、学校行事等のために必要な時間を確保する。 ・学校行事に関しては、計画やねらいを職員間で共有し、円滑に運営する。	A	・「年間行事計画が職員間で共有され、授業時間数の確保と円滑な学校行事の運営が行われている。」と回答した職員は95.7%であり、授業時間数の確保と学校行事等が両立できた。	A	・特になし	教務主任	

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目

重点取組			具体的取組	最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)		達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
○個別の教育支援計画	○個別の教育支援計画	○「幼児児童生徒及び保護者の希望やニーズに基づいた個別の教育支援計画が作成され、運用されている」と回答する教員・保護者80%以上	・本人、保護者の希望やニーズを的確に把握し、作成相談や支援会議を通して、個別の教育支援計画を作成・運用する。	A	・「幼児児童生徒及び保護者の希望やニーズに基づいた個別の教育支援計画が作成され、運用された」と回答した職員は98.6%、保護者は94.4%であった。	A	・特になし	相談支援 部主任
○個別の指導計画	○個別の指導計画	○「個別の指導計画を生かした指導・支援が適切に行われた」と回答する教員・保護者80%以上	・個々の実態と教育的ニーズに応じた指導計画を作成し、職員間、保護者との情報共有を密にしながら指導・支援を充実させる。	A	・個々の実態把握を綿密に行い、一人一人の教育的ニーズに沿った指導計画を作成した。また、学部・学科間で必要な手立てを共有しながら指導に当たった。職員の98.6%、保護者の90.9%が「個別の指導計画を生かした指導支援が適切に行われた」と回答した。	A	・特になし	各学部主 事
○校内研究・職員研修の充実	○校内研究・職員研修の充実	○「校内研究・職員研修により指導力が向上した」と回答する教員80%以上 ○「校内研究・職員研修の充実」に努めている」と回答する保護者80%以上	・校内研究・職員研修を計画的に実施し、視覚障害教育の専門性の向上、授業実践指導力の向上を図る。 ・新転任者研修や校内スキルアップ研修、外部講師による授業参観指導等を実施するとともに、出張報告会を通して研修の成果を共有化し、視覚障害教育の指導力・専門性の向上を図る。	A	・公開講座を4回実施し、外部講師による職員研修を2回実施した。「校内研究・職員研修により指導力が向上した」と回答した職員は98.6%で、保護者は81.8%であった。校内研究は3年計画の最終年度であり、各学部で「研究報告」にまとめ共有し、研究研修を推進した。	A	・指導力向上の評価は、職員の自己評価だけではなく、生徒や保護者も含めた評価にすると客観性がある。教師の言葉かけ、態度、姿勢なども評価していく。これからの教育は、教師側からだけでなく、生徒とともににつくっていく方向にしていける必要がある。 ・分からないから分かるように努める先生を目指してほしい。 ・歩行訓練士は貴重な専門家なので、継続して指導してほしい。 ・専門性担保のために、同行援護従事者資格取得や、歩行訓練士の養成研修など計画的に育成・配置し、組織としての底上げを図ってほしい。その際、単一と同等に、重複の専門性を大事にしてほしい。	研究研修 部主任
○教育の質の向上に向けたICT利活用	○教育の質の向上に向けたICT利活用	○ICT機器を利用して、幼児児童生徒一人一人の視機能に応じた教材を活用できる」と回答する教員90%以上 ○情報セキュリティ確保に関する調査に対し適切に行っていると回答する職員100%	・ICT利活用教育について、視覚障害のある幼児児童生徒に特化した教材の工夫に関する研修会を行う。 ・「ICT-LETTER」を発行してICT利活用教育・情報セキュリティに関する情報を提供する。	A	・「研修会やICT-LETTERにより提供された情報等をもとに、ICT機器を利用して、幼児児童生徒一人一人の視機能に応じた教材を活用できている。」と回答した職員が89.7%であり、おおむね職員のニーズに沿った研修や情報提供ができたと考える。	A	・特になし	図書・情報 部主任
○寄宿舎における生活指導	○寄宿舎における生活指導	○「寄宿舎生一人一人の実態に合わせ、自立に向けた支援指導が達成された」と回答する指導員・保護者80%以上	・個々の寄宿舎生の実態把握を綿密に行い、指導員全体で最も適切な手段を講じる。	A	・寄宿舎生一人一人の実態に合わせ、自立に向けた支援指導が達成されたと回答した職員は97.2%、保護者は83.3%（未記入・わからないを除く）であった。舎生一人一人の実態把握を丁寧に行い、寄宿舎指導員間で情報共有しながら、自立へとつながる姿を明確にして、自ら考え行動する力を引き出せるよう支援指導ができた。	A	・寄宿舎を利用したいと思っているが、なかなか寄宿舎の利用ができない。もう少し利用しやすいようにしてほしい。特に、食事、入浴、排泄のことも考えてほしい。	寮務主任 主任寄宿 舎指導員

●…県共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育

5 総合評価・次年度への展望	今年度は『夢をはぐくみ、未来をひらく盲学校』～「誰もが安心して学べるやさしい学校づくり」を進めます～ を掲げ、3つの重点目標を定めた。重点目標の達成に向け、それぞれの取組は年間をとおして着実に遂行できた。その結果、達成度はおおむね高い評価が得られ、保護者や学校評議員からも肯定的に評価していただいた。県内唯一の視覚特別支援学校として、保護者、学校評議員からいただいた意見や提言を取り入れながら、更なる指導力向上のため、研修体制の充実にも努めていくこと、一人一人が安心して学ぶことができるよう、不安や悩みに寄り添う学校作りに取り組み、幼児児童生徒及び保護者のニーズを汲み取った学校運営に努めていきたい。
----------------	--

達成度(評価)
A: 十分達成できている
B: おおむね達成できている
C: やや不十分である
D: 不十分である